［認知症対応型共同生活介護用］

1. 調査報告概要表

作成日　平成21年3月19日

【評価実施概要】

事業所番号	4771000066
法人名	社会福祉法人　千寿会
事業所名	グループホーム寿
所在地	〒901－0362　沖縄県糸満市真栄里323番地 （電　話）098－992－5375

評価機関名	沖縄県社会福祉協議会
所在地	沖縄県那覇市首里石嶺町4－373－1
訪問調査日	平成21年2月26日

【情報提供票より】（21年1月19日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	昭和・(平成)　12　年　4　月　10　日	
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計　9　人
職員数	13　人	常勤　10 人，非常勤　3　人，常勤換算 10，4 人

（2）建物概要

建物構造	鉄筋コンクリートブロック造り陸屋根平屋造り
	1階建ての　階　～　1階部分

（3）利用料金等（介護保険自己負担分を除く）

家賃（平均月額）	30,000　円		その他の経費（月額）	円
敷　金	有（　円）		(無)	
保証金の有無 （入居一時金含む）	有（　円） (無)		有りの場合 償却の有無	有／無
食材料費	朝食	300　円	昼食	600　円
	夕食	400　円	おやつ	100　円
	または1日当たり　円			

（4）利用者の概要（1月　19日現在）

利用者人数	9名	男性	1 名	女性　8 名
要介護1	2　名		要介護2	4　名
要介護3	2　名		要介護4	1　名
要介護5	名		要支援2	名
年齢　平均	83.1 歳	最低	60 歳	最高　93 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	医療法人南嶺会　勝連病院

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

主要道路よりやや奥まった小高い丘の周囲を緑に囲まれ、近くにグスク跡や天気の良い日等に散歩で利用している公園がある。理事長をはじめ職員が常に入居者へ対し、生きがいや活力を作り出す取り組みを実践している。平成20年4月より週1回訪問看護サービスを開始し、医療連携体制（重度化や服薬確認等）を整え、訪問看護の日に合わせ、家族の面会が増え、入居者及び家族に安心感を与えている。また、理念の一つに「趣味の活動で生活に張り合いと活気を」をホーム管理者をはじめ、全職員が利用者一人ひとりの特技や趣味（楽器演奏等）を一緒に楽しみながら、日中活動を実施している。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4） 前回の改善課題に関しては、ホーム管理者や職員、家族会で話し合い、改善計画書を作成している。具体的に改善目標として、防災訓練の実施や看取りを含めた終末期ケア等、ハード面の経過及び結果の評価を行い、管理者、職員で共に再点検しながら業務改善につなげている。 今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4） ホーム管理者は、全職員へ渡し、自己評価報告書の書式を記入してもらっている。職員自身が普段実践しているケアを振り返る機会として捉えている。事業所全体及び家族会での改善計画書を作成、実施することで、全員で共有する機会となっている。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6） 運営推進会議はきちんと2ヶ月に1回継続して開催している。毎月の活動内容や家族会開催についてや提案された啓蒙活動の一環として、利用者が作成した手工芸作品を福祉祭りや役所内のコーナーで展示している。参加は、ほぼ全員（本人、家族、事業所、行政、大学教授、民生委員）が参加している。音楽療法等の提案もあり、事業所もそれに向けて実施予定である。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8） 担当職員が電話連絡で定期的に利用者の日頃の様子を報告し、来訪する家族や行事参加時に写真や介護計画書を見てもらっている。また、サービス担当者会議に家族も参加し、要望や意見を全職員で共有し、普段のケアに反映している。
重点項目④	日常生活における地域との連携（関連項目：外部3） 近隣の幼稚園（週2回）や地元老人クラブとの定期的交流も図っている。また、併設する認知症対応型通所介護や地域ボランティアとの交流も深めている。また、開設以来、毎年糸満市綱引きや那覇マラソン大会の応援をかかさず、利用者の楽しみな恒例行事となっている。

2. 調 査 報 告 書

（ ▒ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	現在の理念文面では、地域という改まった表現ではなく、ホーム内での生活が利用者にとって、家庭的で馴染みと暖かみあふれる環境つくりとして家庭の延長線という理念に基づいている。今後も更なる地域密着型サービスとしての改善、見直しを月初めの職員定例ミーティングに取り入れ、検討している。		「家庭の延長線と考えている」というホームの大切にしていることを話し合い、職員自身の言葉で表現して「地域密着」という具体的な文書を付け加え、理念を作りあげていくことも大切にしてほしい。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	毎月の勤務表に理念と管理者の「私の求める理想の職員像」が書かれている。また、定例職員ミーティングでは、基本理念をその月のテーマに絞り、職員自らの言葉で「目指す介護」を心がけている。例えば、利用者に対し説明をしっかり行ない、利用者本人が納得できるよう丁寧に根気よく理念に基づき実践している。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	地域の公民館でのミニデイサービスや敬老会、クリスマス会等年間行事も併設しているデイサービス利用者と一緒に参加したり、地域ボランティアや幼稚園児を招いたりし、積極的に関わっている。開設以来、毎年糸満綱引き大会や那覇マラソン大会の応援をかかさず、行なっている。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	管理者は、全職員へ自己評価報告書の書式を渡し、記入してもらっている。職員自身が普段実践しているケアを振り返る機会として捉えている。前回の外部評価及び自己評価の反省を管理者、職員で共に再点検し、介護日誌の書式や記入方法等の業務改善につなげている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在も会議に利用者の家族が参加しているが、他の利用者の家族にも声かけして会議への参加を促している。運営会議で提案された「こんな時どうする会」では、職員や管理者が講師として認知症勉強会や介護教室を役所やホーム内で実施している。	○	議事録次第は作成されているが、議事録が作成されていない。現在の記録作成担当者1人での負担が要因であれえば、職員での持ちまわり等を検討しながら、作成に向けて取り組みしてほしい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	ホームの管理者が市町村主催の認知症勉強会の講師をつとめたり、ホームでの介護勉強会へ福祉担当者が参加したりしている。運営会議で提案された啓蒙活動の一環として、利用者が作成した手工芸作品を福祉祭りや役所内のコーナーで展示している。		
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	家族連絡担当制を実施し、担当職員が電話連絡で定期的に利用者の日頃の様子を報告し、来訪する家族や行事参加時に写真や介護計画書を見てもらっている。また、職員間で連絡申し送り帳を活用し、担当職員が不在の場合でも確実に申し送りができるよう対応体制が整っている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	開設当初からサービス担当者会議に家族が参加し、家族からの意見を反映させる仕組みがある。家族からの要望（例えば寝ぐせに気をつけてほしい等の細かい要望等）も申し送り時に全職員で共有し、ケアに反映している。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	利用者担当制を平成16年頃から実施している。職員自ら積極的に担当希望があり、管理者や介護主任等で、経験年数等総合的に調整し組んでいる。職員の退職もここ1年は1名のみで、その際は利用者、家族へ口頭で伝えおり、退職による直接的な影響は見られない。		
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホームから研修会情報を職員へ提供している。介護主任が参加者の偏りがないよう調整し、小規模多機能型施設見学や市町村、県主催研修会（認知症利用者との関わり方や介護技術等）に参加している。研修会報告も定例ミーティング時に行い、職員間で共有している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会へ加入し、年3回の施設見学や同業者との研修会、勉強会へ積極的に参加して、交流や情報交換を図っている。職員も他のホーム職員と関わる中で、自己を見つめ直す機会となり、利用者への対応等サービスの向上につながっている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1．相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	サービスを利用するにあたっては、家族が毎日ホームへ通ってもらい、本人が馴染めるように家族と連携を取っている。共同生活を1週間過ごすが、馴染めない場合は、家族と再度話し合い、本人の安心と納得が得られない時は、本人の自己決定を尊重している。		
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者に「短気は損気」と教わったりしている。感謝の気持ちの大切さを学び、「ありがとう」という言葉が自然に出て、利用者とお互い思いやりの心で接している。また食後のお茶の時間は、食卓で、一緒に童謡を歌ったり、趣味の話を聞いたりしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	サービス担当者会議の時に本人、家族からの希望や意向を聞いている。本年2月からは、介護日誌にもケアプランを書き込み、各個人のケアプランに添ったサービスを実施し検討している。		
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	管理者は計画作成業務を兼務している。利用者担当者からは、申し送りや定例ミーティングで日頃の様子を、またサービス担当者会議では、家族からの情報を得て、利用者の意向及び家族や職員の意見を反映させ、計画を作成している。（アセスメントからモニタリングに到るまで整合性のある内容となっている）		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	定期的な見直しだけではなく、利用者の生活状態の変化により介護計画を変更している。（例えば、口臭が気になる時や退院等）見直しに当たっては、職員、家族だけではなく、協力医療機関のかかりつけ医との緊急時対応等の連携がとれている。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
３．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	家族とのいい関係を保たせる事から定期的な「ふるさと訪問」としてホームから自宅へ帰る（逆デイサービス）等の工夫を実施している。利用者と家族とのいい関係を保たせながら、職員、家族が利用者の日々の変化に気づき、利用者自身もホームや自宅が安心できる場所と感じている。		
４．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	通院介助は基本的に家族対応であるが、個別の治療法等により職員も申し送りが必要な場合は一緒に同行している。また、ケアチェック表（食事・入浴・排泄等）から日常生活の情報をコピーして家族へ持たせたりしている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	家族会や担当者会議時に、重度化した場合の対応及び看取りケアの指針を見てもらい、ホーム側が同意書文書を作成し家族から同意を得ている。週1回の訪問看護との連携を実施し医療連携体制を整え、医療面（重度化等）での支援方法や家族、職員の心構え、対応についての助言も受け、共有を図っている。		
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 １．その人らしい暮らしの支援 （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	定例ミーティングの折にトイレ介助や入浴法で職員の意識向上を図るとともに、日々の関わり方を職員同士で確認しながら、利用者の誇りやプライバシーを損ねない対応を徹底している。写真や掲示物は本人・家族に個人情報の取り扱い文書を説明し同意を取っている。個人情報に関する書類は事務局で管理している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の化粧品等を購入する場合は馴染みのお店へ一緒に買い物に出かけている。好きな楽器（オルガン）を居間で弾きながら、利用者や職員へ聞かせてくれたり、午後の時間は、庭園への水やりや洗濯物たたみ等、職員が声かけ見守りながら支援している。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	家庭菜園で収穫した野菜や家族から差し入れされた野菜を食材にいかし、献立を決めている。時には鮮魚店を経営していた利用者が新鮮な魚をさばいてくれたり、食事の下ごしらえ等手伝ってもらったりしている。利用者と職員も同じテーブルで、食材や日常生活の話をしながら、楽しく食事できるよう雰囲気づくりを大切にしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	利用者の希望により曜日選択は可能であるが、時間帯に関しては、冬場が午前中、夏場が午後実施され、週3回対応している。希望者によって毎日入浴が可能である。入浴を拒否する場合も個別に情報収集し、ドライブに行く前に着替え等の準備で誘い実施している。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	手紙を書いて孫へ送ったり、アルバム作成など、趣味や得意分野を好きな時間に実施できる環境整備が行なわれている。近隣の保育園へ週2回お花の水かけに行く役割や、動物好きな利用者による番犬2匹への餌やり等も行なわれている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	その日の天気状況や本人の気分、希望に応じて近くの公園へ散歩に行き、またその際は、お弁当を持って出かけたりしている。外出時は、職員が見守りながら馴染みのお店へ日常品等の買い物へ出かけ、利用者が代金支払いを行なっている。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	玄関は日中は施錠せず、利用者や家族が自由に出入りできる状況になっている。夜間、安全対策のため門のみ鍵を閉める。帰宅願望の利用者に対し、そっと職員がついてさりげなく声かけし、ホームへ一緒に戻って来る。（職員は、利用者一人ひとりの行動パターンを事前に把握している。）		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	年2回の防災訓練の実施計画後、夜間を想定した訓練を1回（6月）実施している。年度末に民生委員や近くのコンビニ、近隣の地域住民に連絡可能な方と一緒に実施予定している。また、事業所敷地内に管理者宅もあり、緊急時マニュアルも作成されている。	○	緊急時マニュアル等、災害対策に関する記録等は備えつけている。今後は、フローチャート図作成及び連絡網や連絡方法手順を、職員が見やすい場所へ掲示する等の工夫を期待したい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者全員の毎日の食事水分量摂取を、個別健康チェック表に記録している。水分栄養補助として、果物や家族が用意した栄養ドリンク、サプリメントを利用している。また、家庭菜園からの季節の食材が食卓に並び、食欲をそそるよう配慮されている。		
２．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ベランダや玄関前に一人がけの木製椅子が置かれており、高台ならではの緑豊かな景色や季節の花が咲き乱れた庭で、利用者と職員の歌やおしゃべり、楽器演奏等、思い思いの過ごし方をしている。廊下や居間には利用者全員で製作した作品や写真が飾られ、家族が来訪した際にはそれらのエピソード等の会話が弾んでいる。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が希望する場合は、事業所で畳間を準備したり、自宅からソファーや家具類も持ち込み、以前の生活と変わらないよう利用者の状態に合わせた居室作りに配慮している。家族写真や作品を飾ったりと、利用者の個性が感じられる。		